

若紫巻のしくみ

今西, 祐一郎
国文学研究資料館 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/6796083>

出版情報 : 語文研究. 133, pp.1-8, 2022-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



若紫卷のしくみ

一

若紫卷は三つの部分から成り立っている。(一)は光源氏の北山における幼い紫上の発見、(二)は藤壺との密会とその結果としての藤壺の懷妊、(三)は紫上を自邸二条院に引き取つての養育、である。

この三つのうち(一)と(三)とは自然につながり、またその内容も卷名「若紫」にふさわしく、わかりやすい。しかし、「藤壺の宮なやみ給ふことありて、まかで給へり」で始まる源氏と藤壺との密会、そして藤壺の懷妊を語る(二)は、幼い紫上発見(一)、養育の物語(三)の間に割り込んだような形で、唐突の感を否めない。

今 西 祐 一 郎

もつとも、そのような藤壺と源氏との密会、藤壺懷妊にいたる、いわば伏線は、はやく桐壺巻で、母更衣亡き後に父帝の後宮に入ってきた、更衣の倅を宿す藤壺の登場、そしてその藤壺への源氏の幼心に宿った「心の内にはたゞ藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならん人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな」と思い、「をさなきほどの心ひとつにかゝりて、いと苦しまでぞおはしける」という思慕の情を語ることで示されていた。

しかし、このときの源氏はまだ十二歳。そしてその後、元服した源氏と藤壺とのかかわりは、具体的には何一つ語られることはなかった。そこへいきなり「藤壺の宮なやみ給ふことありて、まかで給へり」にはじまって、この好機に逢瀬をと隙を窺う、十八歳の源氏が姿をあらわす。これだけでも物

語の流れを無視した不自然さだ。

しかも、源氏に迫られた藤壺に関連して、「宮もあさましかりしをおぼし出づるだに世ともの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深うおぼしたるに」という、読者が始めて知る、書かれていなかった源氏十二歳から十八歳までの空白期間の二人の接点が明かされるのであった。「あさましかりし」とは、はやく『花鳥余情』が、「是よりさきに、源氏君、女御へちかづき参り給へること、この詞にみえたり」と指摘するように、この若紫巻の逢瀬以前に、藤壺と源氏は、物語に書かれていない、わりない逢瀬を持っていたということの意味する。

このような若紫巻のかたちを、近代の『源氏物語』研究は、次のように評している。

若紫の巻では藤壺との恋物語にふれる前、早くも藤壺の代位者たる紫上が點出され、次いで何の予告もなく源氏藤壺との肉体関係、不義の子をあげる記述に入る。桐壺の巻で源氏が藤壺に恋を感じるのは十二歳の頃の事である。若紫の巻は十八歳の時である。この間に二人の間に恋の發展があつたことは、若紫の巻の記事で明かである。この源氏物語の中心モチーフに即した最も重要な恋の發

展が全然記述されて居ない。このような構想は自然といえるであろうか。物語の構想を合理的に立てるとしたら桐壺に次いで藤壺との關係を發展させた巻が必ずおかるべきである。
(武田宗俊『源氏物語の研究』^(注1))

そして、「物語の合理的な構想」として「桐壺に次いで藤壺との關係を發展させた巻」の必要性を説き、藤原定家の『源氏物語』注釈の覺えとでもいうべき書『奥入』に記載される「輝く日の宮」という巻名に言及して、次のように言う。

こゝに奥入の記事、巻名が源氏と藤壺との關係を記したものと推定させる輝く日の宮の巻が存したという説の顧みられるべき十分の根拠があるといわねばならぬ。

すなわち、若紫巻で唐突に「あさましかりしを」と語られた、源氏と藤壺との若紫巻以前の逢瀬は、今は伝わらぬ「輝く日の宮」という巻に書かれていたのだらう、という想定である。

この「輝く日の宮」については、それより先、玉上琢弥が昭和十六年の「源語成立攷」という論文^(注2)で、それを『源氏物語』に先行する別の物語、すなわち「輝く日の宮」の物語

は、あの当時数かぎりなくあつた上の品の物語であつた」と見なし、次のように述べていた。

「輝く日の宮」は、「光君」に対して、藤壺がえさせられた渾名である。「輝く日の宮」の巻には藤壺の宮が特に印象深く出ておられることであろう。この方に対する光る源氏の恋を、この物語の作者は特に注意したことである。

玉上はこの論文の中で、若紫巻の「あさましかりしを」については言及していないが、藤壺が「あさまし」と思った若紫巻以前の源氏との逢瀬が、そのような「輝く日の宮」巻に書かれていたと考えることは玉上の見解と齟齬するものではないであろう。

二

しかし、定家『奥入』にその名が見える「輝く日の宮」という巻名は、じつは定家自身によつて「この巻もとよりなし」と注記されていた。したがつてその存在に確実性は乏しく、今日それを根拠とした立論はほとんど見られない。

問題は、仮に百歩譲つて現存しない「輝く日の宮」の巻がかつては存在し、そこに源氏と藤壺の最初の逢瀬が書かれていたということを確認としても、北山での幼い紫上の発見の直後に、「藤壺の宮なやみ給ふことありて、まかで給へり」で始まる源氏・藤壺の密会場面が続く若紫巻の唐突感はない点にある。そのような、「輝く日の宮」という巻の存在という仮定を活用しても氷解しないことへの疑問を、鈴木宏子は次のように述べている。

若紫巻は何故このように語られるのだろうか。二つの出来事が並行して進むにしても、例えば若紫巻では後景に退いていた朱雀院行幸が紅葉賀巻で改めて詳述されるように、それぞれの出来事を異なる巻にふり分けて語っていくこともできたのではないか。あるいはまた、藤壺との密通・懷妊が先行し、その話しが一段落したのちに、悩み疲れた光源氏が北山に赴いて一服の清涼剤となる紫の上を見出すというようなプロットもあり得たのではないか。

（『若紫巻と古今集』^{（注3）}）

そして鈴木は、現代人が物語の筋の展開に求める合理性とはまったく別の観点から、上記のような若紫巻の不自然さを

説明しようと試みた。

紫の上と藤壺の物語はいずれも、それぞれの仕方です『古今集』恋歌の表現と配列を踏まえて語られている。述べてきたとおり、光源氏が尼君たちと取り交わす求婚歌群は、『古今集』恋一から恋三の配列に沿うようにして展開し、また『古今集』恋三が描く「初めて逢う一夜」の表現は、藤壺宮との逢瀬の場面のすみずみにまで浸透していた。若紫巻の中で二つの物語は分かちがたく結びついたものとして語られるが、『古今集』と照らし合わせてみても、一つの時間軸の上に位置づけることができる。二つの物語を合わせることで、出会いから逢瀬までの一つの恋の結構が浮かび上がるのである。

たしかに鈴木指摘するのとおり、北山での若紫発見・遭遇の物語から藤壺・源氏の密会にいたる物語の展開は、『古今集』恋部の配列、(恋一の「恋の始発」から恋三の「逢わずに帰る日々」、「初めて逢う一夜」に沿っていると言える。しかし、それが若紫巻の構成の意図だったのだろうか。世俗に「逆は必ずしも真ならず」という。

若紫の発見・遭遇から源氏と藤壺の密会までに詠まれた歌

の内容が、『古今集』恋部の配列に沿ったものになっていることから、ただちに若紫巻が、『古今集』恋部の表現と配列を踏まえ」て書かれた、という結論を導きだせるのだろうか。鈴木説明では、若紫発見・遭遇のあとに、源氏の藤壺との密会が語られたのは、『源氏物語』の作者が、『古今集』恋歌の部立ての進行にあわせて物語の筋を展開させた、ということになりかねない。

若紫の発見・遭遇、藤壺との密会というテーマを『古今集』の恋歌を援用しつつ書き進めれば、巧拙はともかく、誰が書いても似たような結果になるのではないか。鈴木解釈は、「輝く日の宮」の巻の存在という誘惑にまどわされず、本文からの検証を試みたという点で傾聴に値するが、それは若紫巻の筋の運びを「逆は真ならず」の「逆」のプロセスで説明しようとした作業のように思われる。北山の場面に続く、「藤壺の宮なやみ給ふことありて、まかで給へり」以下の唐突な本文出現の理由は、依然闇の中にある。この難問を解く鍵はどこにあるのだろうか。

三

そこで視点を、「若紫」という巻名に転じてみたい。

『源氏物語』の巻名は、従来、その巻の和歌、あるいは本文に見出される象徴的な語をもって巻名にした、と考えられてきた。しかし、「若紫」という巻名は、五十四帖最後の巻名「夢の浮橋」とならんで、本文中にその語が見えない例外的なケースである。明らかに『伊勢物語』初段の、都の外で思いがけない女に遭遇するという状況を踏まえて書かれた紫上発見の物語で、幼い紫上は和歌において「初草」「若草」の語で指し示されているものの、「若紫」の語は用いられていない。従来考えられてきた命名法則では説明できない巻名だった。

『源氏物語』巻名の命名法について、画期的な新見解を提示したのは、清水婦久子『源氏物語の巻名と和歌 物語生成論へ』である。清水は従来の考え方をひっくり返して、次のように述べる。

源氏物語の巻名は、歌合の課題と同じく、物語を製作するための〈お題〉であり、それぞれの巻の物語は、題詠歌と同じく、題に基づいて物語が構想され、歌物語と同様に歌を発端にして場面が作られた。そして物語が肉付けされ、初期の物語から後の物語へと受け継がれ長編化していった——と想定する。

この意表を突いた新説は説得力があり、たんに巻名だけでなく、『源氏物語』という作品そのものに対する見方に変革を迫るものである。

だが、当面の問題に立ち戻ると、「お題」として「若紫」という巻名が物語の内容に先立って与えられたとしたら、そのことは若紫巻の構成とどのように関わってくるのだろうか。巻名が先にあったとしても、今日の読者が感じる若紫巻の構成の唐突さは容易には消えないように思える。より自然な展開としては、前記鈴木が指摘しているように、「藤壺との密通・懷妊が先行し、その話しが一段落したのちに、悩み疲れた光源氏が北山に赴いて一服の清涼剤となる紫の上を見出す」というようなプロットもあり得た」からである。

物語作者としては、「若紫」という「お題」が出された以上、「春日野の若紫のすり衣忍ぶの乱れかぎり知られず」の歌をもつ『伊勢物語』初段を抜きにした構想は立てられなかったであろう。それゆえに若紫巻は、北山での源氏の紫上との遭遇から始まる。

しかし、その次に一見唐突に見える源氏と藤壺の密会、そして懷妊へと物語を展開させたのには、どんな理由があったのだろうか。繰り返すが、今日の読者にはよくわからない。けれども、「お題 若紫」を、作者が狭く『伊勢物語』初段に

のみ限定せず、少し幅を広げて『伊勢物語』的物語執筆の要請」と受け止めたとしたら、どうか。

今日の読者は、『伊勢物語』の各章段を、それぞれ独立した歌物語の小品として読みがちである。しかし、古くはそうではなかった。初段「初冠」から最終段「つひに行く道とはかねて聞きしかど」までを、なだらかに連続した業平一生の物語として受け取るという読み方である。

そのような読み方で『伊勢物語』に接したとき、春日の里での「女はらから」との遭遇の次に業平が迎える人生の一幕は、どのようなものであったか。それは二条后との恋であった。

現に三段、五段、六段には、いわゆる後人注記という形で、「男」の相手が二条后であることを明記している。

二条の後のまだ帝にも仕うまつり給はで、たゞ人にておはしましける時のことなり。
(三段)

二条の後に忍びてまゐりけるを、世の聞えありければ、兄人たちのまもらせ給ひけるとぞ。
(五段)

これは二条の後のいとこの女御の御もとに、仕うまつる

やうにてゐ給ひけるを…。

(六段)

だが、異論があるかもしれない。なぜならば初段「春日野の若紫」につづく二段は、

むかし、をとこありけり。ならの京は離れ、この京は人の家まださだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。それをかのまめ男、うち物語らひて、帰り来て、いかゞ思ひけむ、時は三月のついたち、雨そほふるにやりける。起きもせず寝もせで夜をあかしては春のものとてながめ暮らしつ

というもので、登場する「西の京」の女が二条后であることなど、どこにも書かれていないからである。

実際、近世の『伊勢物語』受容に強い影響力をもった、宗祇の講釈の聞書『伊勢物語肖像抄』や細川幽斎の手になる『伊勢物語闕疑抄』は、「この女誰ともなし」、つまり誰と特定できない、と述べ、その影響は今日の注釈書にまで及んでいる。ただし、このような解釈は、『伊勢物語』享受の歴史の中で

は比較的新しい。それ以前の鎌倉時代、さらに遡って平安時代の読み方を伝えているかもしれないと推測される『冷泉家流伊勢物語抄』では、この「西の京の女」も二条后とされていた。

西の京に女有けりとは、二条の后いまだ春宮の御息所に
て長良卿の西の京にある時の事也。^(注5)

その古来の解釈を『肖聞抄』や『闕疑抄』は、「不用」として退けたのである。

また、「月やあらぬ」の歌で知られる四段も、『伊勢物語』本文には相手の女「西の対に住む人」が二条后であるとは、どこにも記されていないが、『和歌知頭集』や『冷泉家流伊勢物語抄』の古注以来、それは二条后にはかならなかった。

西の対にすむ人は、二条の後也。

(書陵部本『和歌知頭集』^(注5))

西のたいと云は、二条后いまだ東宮の御息所にて住し給
ひし西のたいの家なり。
(『冷泉家伊勢物語抄』^(注5))

四

『源氏物語』制作の周辺にいた人々、またそれを読む人々にとって、上記のような初段の春日野での「女はらから」との遭遇から二条の后との恋へという『伊勢物語』の筋の流れは、業平の人生の重大な局面として周知のことであつたに違いない。春日野と二条后というセットが、七段に始まる東下り以前の、若き日の業平の行状として古代の読者の脳裏には焼き付けられていたはずである。

とすれば、今日の読者には唐突に感じられる藤壺の登場も、『伊勢物語』の初段から六段までの流れを業平の生涯として受け入れることに親しんでいた古代の読者には、自然な、むしろ予想され期待される流れであつたのかもしれない。若紫巻の作者は、そのような形で「お題」としての巻名「若紫」に答えようとしたのではなかったか。

清水は同じ著書の中で、

源氏物語が伊勢物語から受け継いだ最大の要素は、歌を基盤として物語世界を作ることではなかっただろうか。

と述べて、若紫巻創造のプロセスを先行する和歌を博搜して跡づけようとしている。その作業は精緻を極め有益であるが、本稿の問い、なぜ北山での若紫発見・遭遇の物語につづいて源氏・藤壺の密会場面が語られたのか、という問いを満足させる答えではない。

たしかに若紫巻の表現という側面は清水の作業によってほぼ完璧に解明されたといつてよい。しかし若紫巻の構成は、『伊勢物語』およびその周辺の「歌」だけでは説明できない。それは、春日の里の物語から二条後の物語へという、『伊勢物語』の章段展開を襲うこととでなされたと考えることによって、初めて納得できるのではないだろうか。平安時代の『伊勢物語』読者には、「若紫」とは、たんに「男」が「春日野の若紫のすり衣」の歌を詠む初段だけでなく、二段以下に続く二条后との恋へという『伊勢物語』初発部を連想させる言葉だったのではないか。

『伊勢物語』初段から六段までが、東下り以前の、若き日の業平の所業を語るひとまとまりであるということとは、平安時代の読者に共有されていた暗黙知だったと考えられる。思うに「若紫」とは、その暗黙知を象徴する一語だった。

若紫巻の藤壺の登場に違和感をいだき、その違和感の解消を「かがやく日の宮」という名のみ伝わる巻に求めようとし

た武田宗俊や玉上琢弥の考えは、平安時代の読者の暗黙知を何とか言語化しようとする近代の「知」の欲求だったといえよう。しかし、それを言語化する必要など平安人にはなかったのである。

若紫巻はそのような暗黙知のもとに書かれ読まれたものではなかったか。『伊勢物語』では、六段のあとに「東下り」の章段が続く。それが、光源氏の須磨下りと緩やかな並行関係を有することは、あらためて言うまでもあるまい。若紫巻から須磨巻へ、一条朝の読者は、光源氏に業平の時勢粧いまよすがたを見ていたに違いない。

注

注1 一九六〇年、岩波書店刊。

注2 『源氏物語研究』（一九六七年、角川書店刊）所収。

注3 『王朝和歌の想像力 古今集と源氏物語』（二〇一二年、笠間書院刊）所収。

注4 二〇一四年、和泉書院刊。

注5 片桐洋一『伊勢物語の研究』資料編（一九六九年、明治書院刊）所収。

（いまにし ゆういちろう・国文学研究資料館名誉教授）